

# GLOBE

<http://www.intcul.tohoku.ac.jp>

国際文化研究科 広報

No. 36

Oct 2023

## Contents

### 02 研究科長メッセージ

### 03 受賞報告 優秀論文紹介

### 04 国際共同研究

内原 卓海 講師  
ジョン・ヒョンジョン 教授  
中山 真里子 教授

クリントン・ゴダール 准教授  
オリオン・クラウタウ 准教授

### 06 新任教員紹介

目黒 志帆美 准教授  
内原 卓海 講師  
松本 明日香 講師

### 07 新刊紹介

### 08 退職教員からの言葉

杉浦 謙介 教授  
鈴木 道男 教授

### 09 修了者からのメッセージ

呉 佩遥 さん  
三木 良子 さん

### 10 科研費採択報告

### 12 INFORMATION

- キャリア講習会
- 公開講座
- 国際シンポジウム
- オンライン入試説明会
- 入試日程

## 研究科長メッセージ



### 国際文化研究科長 江藤 裕之

今年、国際文化研究科は創設30周年を迎えました。これもひとえに、諸先輩をはじめ、本研究科の構成メンバー、関係各位のご努力、ご支援、ご愛顧の賜物であると深く感謝いたします。

この30年を振り返ってみますと、本研究科のみならず、私たちを取り巻く世界そのものが大きく変貌しました。とりわけ、IT/ICTの目覚ましい進歩と、AIの驚くべき進化により、教育・研究の環境は大きく変わりました。インターネットによる瞬時に可能な資料検索、遠隔でも可能なオンライン授業やオンラインシンポジウムなど、私の学生時代のころを思うと、まさに隔世の感があります。さらに、2020年から3

年ほど続いたコロナ禍の影響により、私たちの日々の生活や仕事のありようにも大きな変化がもたらされたことは皆さんも感じられていることと思います。私たちは、まさに、身をもって社会全体のパラダイム変換を経験しているところです。

こういった世の中の変化を敏感に受け止めながら、時流に逆らうことも、また易きに流されることもなく、本研究科をさらに発展させ、社会の期待に応えていかなければならないと思います。そのためには、「国際的な地域文化および文化交流に関する学際的、萌芽的な教育・研究を行い、国際化の進展に対応してわが国の内外で活躍し、国際貢献を担う人材を養成する」という本研究科の原点である創設の精神を大切にしながら、新しい時代における研究科のあり方を考え、研究科への期待に応える教育・研究活動のイノベーションを推進していかなければなりません。まさに、不易流行を見きわめていくことが求められています。

私は、本研究科を構成するメンバーのポテンシャルはとても高いものだと思っています。そういった個々の教員・学生の可能性、潜在能力を最大限に引き出すことのできるような、よりよい体制を構築していくことが、私をはじめとする現執行部の役割であると考えています。とりわけ、各教員が研究・教育に充てることのできる十分な時間の確保は重要であり、そのために、研究科組織編制や委員会業務の再点検を行い、全学教育への貢献の方法を見直していく必要があります。学生の皆さんには、研究推進のインセンティブとなるような新たな経済サポート制度を充実させていくことを進めていくことが大きな課題の一つとなっています。

また、国際共著論文数や国際トップジャーナルへの論文掲載数による国際的研究指標の向上、国内外の大学・研究機関との組織的連携の推進、外部資金の増加・産官学連携の支援、広報の強化など、研究科のプレゼンスの更なる向上をめざした運営を実施していきます。さらに、30周年を機に、これまで以上に同窓会のつながりを強化し、同窓生の多い国・地域に本研究科同窓会のハブとなる組織を作り、さまざまな交流に加えて、本研究科へ学生を推薦してもらうなど、学生定員充足率の向上をめざした取り組みも強化したいと考えています。

最後に、研究科創立30周年の記念式典についてお知らせいたします。本来であれば今年度のどこかで式典を行うべきですが、現在、宿願であった研究科西棟の改修工事が進行中で、令和6年5月以降に完成、引っ越し作業が予定されています。そこで、この改修工事の終了後、新しい西棟の紹介も兼ねて30周年の記念式典を執り行うこととなりました。開催方法をオンサイトかオンラインか、あるいはハイブリッド形式にするかも含め、記念式典の具体的な内容につきましては、現在、担当委員会で検討中ですが、決まり次第皆さまにご案内いたします。来年、本研究科にご縁のある方々とともに30周年をお祝いできることを心から楽しみにしております。



## 受賞報告

○アジア・アフリカ研究講座の博士後期課程に在籍する王霄漢さんが日中関係学会第11回宮本賞の優秀論文賞(大学院生の部)を受賞しました。

○アジア・アフリカ研究講座の博士後期課程に在籍する張蕊さんが日中関係学会第11回宮本賞の特別賞(大学院生の部)を受賞しました。

○国際文化研究科アジア文化論修了の朱琳氏が「戦時期日本における中国白話文学の受容—松枝茂夫訳『思痛記』とその背後」(日本国際文化学会年報『インターカルチュラル』第20号所収)という研究論文で、平野健一郎賞を受賞しました。

○アジア・アフリカ研究講座博士後期課程の張蕊さんの研究「周作人の女性解放運動の体系化に向けた研究—生涯にわたる言論運動とそれを支えた国際的知見の所在—」が、第10回澤柳記念DEI奨励賞を受賞し、DEI(多様性、公正性、包摂性)に関する研究について、今後一層の成果や活躍が期待される若手研究者として表彰を受けました。



## 優秀論文紹介

Cui, H., Jeong, H\*, Okamoto K., Takahashi D., Kawashima R., & Sugiura M. (2022). Neural correlates of Japanese honorific agreement processing mediated by socio-pragmatic factors: An fMRI study. *Journal of Neurolinguistics*, 62, 101041. <https://doi.org/10.1016/j.jneuroling.2021.101041>

Liu, C., Wanner-Kawahara, J., Yoshihara, M., Lupker, S. J., & Nakayama, M. (in press). Cognate translation priming with Chinese-Japanese bilinguals: No effect of interlingual phonological similarity. *Journal of Experimental Psychology: Learning, Memory and Cognition*. <https://doi.org/10.1037/xlm0001240>

Soe, T., & Eto, H. (in press). Investigating critical thinking in ELT textbooks: A systematic literature review of textbook evaluation studies. *Theory and Practice in Second Language Acquisition*.

Yu, J., Liu, X., Manago, G., Tanabe, T., Osanai, S., & Okubo, K. (2022). New Terahertz wave sorting technology to improve plastic containers and packaging waste recycling in Japan. *Recycling*, 7(5), 66. <https://doi.org/10.3390/recycling7050066>

※太字は本研究科在校生または既卒生、下線は教員。



## 国際共同研究

### 言語系研究強化と国際発信への序章

応用言語研究講座

講師 内原 卓海

教授 ジョン・ヒョンジョン

言語科学研究講座

教授 中山 真里子

国際文化研究科には、様々な研究分野の大きな枠組み(系)がありますが、その一つに言語系があります。言語系は、さらに細分化されて、応用言語研究講座と言語科学研究講座が設置されています。2023年度から、両講座を横断した学際的な研究を行う試みが始まっています。特に、外国語教育専門家(内原 卓海)、神経言語学専門家(ジョン・ヒョンジョン)、心理言語学専門家(中山 真里子)の3領域横断の言語系最前線の研究が始動しています。

内原と中山は、第二言語語彙知識の測定に焦点を当て、心理言語学研究の知見の外国語教育への応用可能性を探る研究に着手しています。語彙知識という選択式や翻訳テストで測定することが一般的ですが、本来の語彙学習の目的は、学んだ語彙を実際のコミュニケーションで流暢に使えるようにすることです。従来のテストでは、「使える語彙力」を測定するには限界があることを問題提起し、心理言語学的手法を用いて、反応速度やプライミング手法を基にした語彙力計測の可能性を探る研究を行っています。現在、本学大学院生と協力して、データ収集・分析を実施しています。本課題についての議論は、10月21日開催のユニバーシティ・カレッジ・ロンドンとの共同シンポジウムイベントで発表されました(タイトル:Psycholinguistic Approach to Assessing L2 Vocabulary Knowledge: A Case of Prime Lexicality Effect)。

内原とジョンは、偶発的語彙習得のメカニズム解明のために、脳科学と外国語教育領域の横断研究に着手しています。偶発的

語彙習得とは、外国語での読書や動画視聴中に、偶発的・付随的に起きる語彙学習のことを指します。従来の研究は、偶発学習の効果を測定するために翻訳テスト結果などの行動データを用いているため、無意識学習や文脈からの単語類推のプロセスを捉え切れていません。この共同プロジェクトでは、fMRI計測を導入することで、偶発的習得の認知プロセス解明に直接切り込んでいきます。

言語系チームでは環境整備にも力を入れています。複数のデータ収集実施室の完備、高い質の音声データ収集を可能とする防音室の設置を予定しており、さらに視線計測機の設置を計画しています。教員間の取り組みだけでなく、学生に対しても領域横断研究のサポートを実施しています。また、教員は授業を含む教育指導のすべてが英語で行われる言語科学総合コース(IGPLS)にも携わっており、言語系研究の国際的なプレゼンスの向上を目指しています。その下地として、外国語習得・教育専門の内原は、神経言語学や心理言語学専門の学生を対象に定期的な輪読会・座談会を開催し、最新の第二言語習得や外国語教育の書籍や論文に関して議論ができる機会を設けています。また、国内外から各分野の著名な研究者を招いた講演イベントも定期的に行っています。招待講演等イベント情報はこちらのリンクをご参照ください。

(<https://sites.google.com/view/lbcresearchcenter>)

東北大発・国際レベルの学際研究を一緒にしましょう！



## 日本学の国際的学際的ワークショップ

国際日本研究講座

准教授 クリントン・ゴダール

准教授 オリオン・クラウタウ

日本学のグローバル化が進む現代において、大学院生は日本語だけではなく、英語でも研究発表ができることが求められている。しかし、異なる言語で研究と発表をすることだけがチャレンジではない。やはり英語圏と日本の学問世界のアカデミック・カルチャーの違いもある。例えば、日本の研究者は、どちらかと言えば発表をフォーマルな形で原稿を読んで、細かい分析に絞った発表を行う一方、英語圏の研究者は、もう少しインフォーマルな形で発表を行い、パワーポイントを使い、途中経過の研究結果を発表し、大胆なアイデアを提示する傾向がある。自己紹介や、発表後のディナーでの会話などにもアカデミック・カルチャーの違いが出てくる。国際日本研究講座思想系の教員であるクリントン・ゴダールとオリオン・クラウタウが指導する学生たちには、できるだけ日本語圏と英語圏のやり方を身につけていてもらいたい。両方の文化を身につけるためには、やはりオンラインの発表会ではなく、対面のイベントが不可欠である。

運良く、ゴダールの母校のシカゴ大学と東京大学、国際日本文化研究センター、そして東北大学が連携し、毎年「日本学の国際的学際的ワークショップ (International Interdisciplinary Workshop in Japanese Studies)」を開催している。英語圏の大

学院生と日本の大学院生が集まり、日本に関する様々なテーマについて研究発表し、議論を行う。歴史学や、美術史、人類学、経済学、政治学など、多岐にわたる分野の学生が参加している。使用言語は英語と日本語。アメリカ人が日本語で発表したり、日本の大学の学生が英語で発表したりすることもしばしばある。学生たちは、自分の研究を他の分野の人たちに説明し、学際的な考え方を身につけなければならない。そのため、このワークショップは多角的・学際的に学ぶ貴重な機会となっている。また、研究発表だけではなく、学生の将来のキャリアのために長期的なネットワークを作るのも非常に重要である。

このワークショップは2013年に始まり、今年で10周年目を迎えた。2019年に初めて東北大学の大学院生も参加した。2020年に東北大学が主催したが、コロナ禍により残念ながらオンラインで開催せざるをえなかった。2022年には、東北大学の学生が初めてシカゴ大学へ行って参加した。

日本学分野の未来を見据えて、International Interdisciplinary Workshop in Japanese Studiesは今後拡大する予定であり、国際日本学の最先端に立つグローバルネットワークとなることを目標としている。







## 新任教員紹介



多文化共生論講座

准教授

目黒 志帆美

2023年4月に国際文化研究科多文化共生論講座の准教授として着任しました、目黒志帆美です。私は2008年に本研究科の博士前期2年の課程に入学して以来、研究員時代も含め10年間本研究科に在籍していました。その後県内の大学での教員生活を経て、この研究科に戻ってきた形になります。私の専門はハワイ史で、19世紀の王権を中心とした文化・政治的変遷を研究するとともに、現代の日本におけるハワイ文化の受容にも関心をもっています。院生時代・研究員時代はアメリカ研究講座（現ヨーロッパ・アメリカ研究講座）に所属していました。

着任してまず驚いたのは、コロナの影響にともなう変化です。学内の教育・研究・業務環境のオンライン化が急速に進み、様々な業務がスマートに遂行されるようになったことは喜ばしいことです。しかし一方で、対面コミュニケーションの機会が激減したこの3年、研究と向き合う学生は孤独感を強めてきたのではないかと感じます。私自身、院生時代の学びの場は院生室

にありました。院生室で先輩や同僚と交わした、なにげない会話や演習の後の議論（愚痴）が研究上のヒントや糧になることがよくありましたし、苦しい論文執筆の過程でも、院生仲間同士で励まし合うことで乗り切ってきた記憶があります。それを思うと、感染拡大防止のためとはいえ貴重な機会が失われたことは残念です。コロナ前の日常が戻りつつあるなかで、少しずつ失われたものを取り戻すことができたらと思っています。

この原稿の執筆前に本広報誌『GLOBE』のバックナンバーを眺めていたところ、第28号（2015）の「修生のメッセージ」に博士課程修了時の自分の原稿が掲載されているのを発見しました。これによると、私にとって本研究科での学びは「研究への挑戦」だったようです。定年退職するときには、本研究科での教員生活が「人生への挑戦」だったと言えるように、新しいことにどんどんチャレンジしていきたいと思っています。



応用言語研究講座

講師

内原 卓海

2023年4月に応用言語研究講座に着任いたしました内原卓海と申します。この場をお借りして、ご挨拶させていただきます。専門は、応用言語学で、とりわけ第二言語語彙習得の研究をしています。

学生時代の大半は埼玉と東京で過ごし、東北に住むのは今回が初めてです。大学学部生の時には1年間アメリカの南オレゴン大学に交換留学生として在籍していました。初めての留学から得た新発見や刺激的な経験が忘れられず、その後も修士課程でイギリスのレディング大学、博士課程でカナダのウエスタン大学で勉強することとなりました。中高時代は卓球部に所属していたため、海外でも大学の卓球部に所属したり、地域のクラブチームに参加するなどして学外の方たちと交流する機会もたくさんありました。

母語が通じない環境で生活していく際に、外国語を使うことの重要性や難しさを体験していく中で、外国語学習や教授方法に興味を持つようになりました。特に日本の英語教育では「6年間義務教育で勉強しても英

語が使えるようにならない」という声をよく聞きます。日本人母語話者が英語学習を難しく感じる原因はたくさんありますが、そのうちの一つの大きな要因が語彙学習にあると考えています。語彙学習というと単語帳を繰り返し読んで書いて覚えてという退屈な反復作業と日々の単語テストを思い浮かべてしまうのではないのでしょうか。しかし、単語学習の目的は単語博士になることではなく、学んだ単語を使ってコミュニケーションすることにあるはずです。私は学生時代、単語帳コレクターになってしまい、お小遣いやバイト代を単語帳購入に注いでいましたが、それでは英語を使えるようにはならないでしょう。

東北大学では「使えるようになるための語彙知識とは何か？」「使える語彙知識を獲得するためにはどのように学ばよいか？」という課題に答えるべく、従来の研究手法のみならず、脳科学・心理言語学などの様々なアプローチを駆使して研究活動に臨んでいきます。



国際政治経済論講座

講師

松本 明日香

2023年4月に東北大学国際文化研究科 グローバル共生社会研究系 国際政治経済論講座に着任しました、松本明日香と申します。アメリカ政治・外交、日米中をめぐる国際関係、グローバル・ガバナンス、国際世論・国際交流などを専門としています。

これまで、博士号取得前後に日本国際問題研究所という外交政策シンクタンクで勤務し、その後、日本学術振興会の海外特別研究員としてワシントンDCに所在するジョンスホプキンス大学高等国際関係大学院(SAIS)に訪問教員として所属して在外研究を行いました。帰国後はしばらく京都の大学に勤務しておりましたが、コロナ禍でいったん自宅の東京に戻り、このたび東北大学に着任しました。ゴールデンウィークには、子供と青葉城に登ったりもしました。緑豊かで、かつ商業圏も発達し、大学に新しいメトロも直結で通り、とても生活しやすい環境だと感じています。

研究内容としては、もともとアメリカの大統領・議会、政治外交を中心に研究していましたが、3.11に端を発してグ

ローバル・ガバナンスにおけるエネルギー政策、環境政策などの研究にも力を入れるようになり、米中関係の動向から通商政策や対外援助・インフラ投資、安全保障政策なども研究するようになりました。特に国内外の政治・外交、国際世論や規範形成などから分析しています。

思い返せば最初は国際公務員を考えていましたが、修士時代に留学をして研究がおもしろくなり、博士課程に進学しました。それ以前には、実家ではアメリカ人の高校生や教員、中国人の小学生やご家族のホームステイを受け入れており、国際関係・国際交流への関心はそのあたりも背景にあるように思います。研究所業務でもアメリカはもちろん、中国や韓国やインドネシアなどの研究所とも研究交流を行ってきました。東北大学には以前から存じ上げている著名な先生が何人もおられ、こちらでも研究交流を深めていけたらと考えています。みなさんも国際文化研究科での研究生活を通して異文化交流を深めていってもらえればと思います。



## 新刊紹介



大谷 亨

『中国の死神』

青弓社、2023年7月

本研究科の修了生である大谷亨さんが、『中国の死神』(青弓社、2023年)を上梓しました。本書は、中華圏広域で盛んに祀られる「無常」という名の死神について考察した中国民俗学

の研究書です。2021年冬に本研究科に提出された博士論文(「無常鬼の研究—〈精怪〉から〈神〉への軌跡」)をベースとした俗にいう「博論本」ですが、その語り口はいたってポップで(しかも、130点以上の図版をフルカラーで掲載!)、幅広い読者層から「濃いのに読みやすい」と好評を得ています。

無常とは、どの時代に、どの地域で、どのような背景のもと誕生した存在なのか、大谷さんは謎に包まれたその歴史を、本学在学中に取り組んだフィールドワークをもとに明らかにしました。「じつは民俗学の専門教育を受けたことはなかったのですが、なかば衝動的に中国に飛び、無手勝流で約2年半、無常を探して探して探しまくりました。自由な学風の国際文化研究科だからこそ許された研究なのかもしれません」と大谷さんは語ります。



和田 萌

『移民を排除する安全保障』

勁草書房、2023年3月

かつてミシェル・フーコーは「権力の役目は社会を防衛することにある」と述べた。彼によれば社会とは、ある者たちが他の者たちから自らを防衛しようように組織されているという。では社会において、守られるべき者とそうでない者はどのように区別されるのだろうか。これが本書を貫く問いである。

2015年にフランスで起きた二つの襲撃事件の首謀者には、フランス国籍を有し、同地で生まれ育った者が含まれていた。それゆえフランスでは、「脅威は国外からやってくるだけでなく、国内にも存在する」という認識が強まった。

このような背景から、「テロ」という脅威からの安全を確保するための諸政策は、国民の保護を目的とするものの、国内で生まれ育ったムスリム系マイノリティをも潜在的な脅威として監視するに至っている。本書では、日常に溢れる「安全」の言説と、それが生み出す排除の様相について論じた。移民やマイノリティが置かれた状況、排除や差別の問題に関心がある方に読んでいただきたい。





## 退職教員からの言葉



応用言語研究講座

教授

杉浦 謙介

### 突きあたり何か囁き蟻わかれ（柳多留）

私は、学生時代、ドイツ文学を専攻しました。1990年4月から東北大学教養部、1993年4月から言語文化部に所属してドイツ語教育を担当してきました。2001年4月に国際文化研究科に配置換えになり、ドイツ語教育に加えて、大学院教育を担当することになりました。そのころ、私は、国立七大学外国語CU委員会（CU: Cyber University）の委員をしていました。また、CALL施設の管理・運営をしていました。大学院への配置換えを機に、私は、ドイツ文学の基礎研究とドイツ語教育の実践研究に加えて、ICT応用言語教育の開発研究もすることにしました。

当時、ICT応用言語教育の分野は、未開拓の状態でした。文字化けを防ぐために文字コードをどうするか、あるいは、乱立した音声ファイル形式とその再生ソフトウェアにどう対応するか、などを考えなければならない状態でした。このような技術上の問題を少しずつ解決しながら、スタンドアローン型のドイツ語CALL教材、ネットワーク接

続型のドイツ語Web教材、そして、eラーニングシステム、および、そのドイツ語辞書を開発研究していき、これらをCALL施設のサーバー群に置いて、ドイツ語教育で実践使用し、その結果を後続の開発研究に活かしていきました。その間もICTは目まぐるしく進化し、AIも一般化していきました。

AIは、さまざまな言語の言語技能を膨大なデータとして蓄積しています。人間は、苦勞して多くの単語を覚えたり、何年も4技能を訓練したりしなくても、この超上級レベルの言語技能を外付けにして、さまざまな言語で読んだり、書いたり、聴いたり、話したりすることができます。なかには、すぐに4つの言語を外付けで使えるようになる人もいますし、また、ある言語を外付けで使いながら、その言語を習得していく人もいます。言語の使い方や学び方が根本的に変わりました。もしも、杉田玄白先生がこれを知ったら、きょううらやましがるでしょうね。



国際日本研究講座

教授

鈴木 道男

### 天気晴朗なれども…

波乱の少ない静かな学生生活？でしたが、私は教養部など三部局を経巡り、ドイツ文学・江戸博物館に続く第三の研究分野と勝手に思う鳥の研究に際し、旧ソ連時代からシジュウカラガンの復元計画のためカムチャツカのツンドラや千島に通い、ヘリコプターが墜落する等生死に関わる際とい経験を三度もしました。北半球初のオゾンホールができた時もその真下に一月おり、草が妙に光って見えるのが気になっていました（葉緑素は紫外線を当てると赤紫色に光ります）。酷い土方焼けをして帰ると額に変な黒子が一つ不気味に広がり、0期のガンとのことで、一泊入院で切除されました。

ソ連崩壊の前日には、先方の鳥類学者が5人私の家に泊まり、グラスを手に清談していました。翌朝二日酔いのままテレビでこのニュースをみると、「ノルマルナ（大丈夫）！」と口々にいいながら顔を引き攣らせたのが忘れられません。

私の研究対象の一つ、江戸時代の日本の本草学的博物学を集大成した幕府の若年寄堀田正敦は、実は大黒

屋光太夫一件とレザノフ一件の陰の対応責任者であり、北方研究の第一人者最上徳内を庇護し、正確な博物学的情報も得ていました。欧米以外で唯一博物学が発達していたのが日本でしたが、新領地の在庫目録作成という西洋博物学と同じ営為を正敦にみる作業を現在進めています。

私事ながら、入試センター長の頃、会う人毎に褒めたと指摘されました。当時戴いた病氣と今も私は戦っています。私の代では今後ロシアとの実のある共同研究は不可能かも知れませんが、何より平和を願わずにいられません。

文学部の旧日本文化研究施設に採用されてから本研究科を退職するまで、37年間私は本学にいました。学部（理学部天文学科）も大学院（文学部の独文）も本学でした。一度も他大学に出ていない点では相当な長記録持ちです。長い間お世話になりました。皆様のご健勝をお祈りいたします。荊妻藤田恭子にも…Danke!





## 修了者からのメッセージ



国際日本研究講座

2023年3月  
博士課程修了

呉 佩遥

### 国際的視野を養うところ

学部研究生として仙台で生活を始め、「近代日本仏教」という世界と出会ったのは、6年ほど前のことです。この6年間の研究生生活を通して、東北大学建学以来の伝統である「研究第一」と「門戸開放」の理念をしみじみと感じました。

「無宗教の国」とされる中国で生まれ、学部も日本語学や日本文学について勉強していた私は、「宗教」という他者のような存在をもっと知りたいという素朴な動機で日本宗教研究の長き伝統を持つ東北大学に入りました。国際文化研究科の近代日本ゼミに属しながら、指導教員のオリオン・クラウタウ先生とゼミの先生たちから密度の高い指導を受け、「宗教」にまつわる一連の問題のみならず、「言葉」そのものの可能性について学びました。いま振り返ってみると、国際文化研究科で過ごした時間は、研究の緊張感と充実感に溢れた日々のみならず、ゼミの仲間たちと励まし合い、お互いの悩みに共感していたとても贅沢なものでした。

また、国際文化研究科に入学することで、分野横断的な

力と国際的視野を育むこともできました。毎年、国際シンポジウムあるいはワークショップに参加する機会があったのみならず、実際にハイデルベルク大学に1年間ほど行き、同大学のハンス・マーティン・クレーマ先生など海外の研究者と交流し、グローバルな視点を持つことができました。そのおかげで、在学中に東北大学藤野先生記念奨励賞と東北大学総長賞を受賞いたしました。

今後、自己の研究成果を国際的に議論し、発信することができる研究者となれるように活躍していきたいとします。また、学生の個性を尊重する教育者となることを目指し、分野全体に豊かな貢献をもたらすことを目標としております。現在、中国の上海師範大学世界史系に属しており、新しく設立された「アジア文明研究センター」の活動の企画に携わっております。国際文化研究科で培った能力を活かしつつ、ワクワクする気持ちで新たな職場でやったことの無い仕事にチャレンジしていく所存です。



国際政治経済論講座

2023年3月  
修士課程卒業

三木 良子

### 人生を変える研究

私が大学院で国際関係を学ぶことを志したのは学部時代でした。もっと深く国際関係を学びたいという思いで、仕事をして資金を貯めながら大学院進学を目指しました。好きなことが学べると意気揚々と東北大に足を踏み入れましたが、自身の知識のなさ、大学での勉強と大学院での研究の違いに悪戦苦闘し、苦しむ日々でした。学部時代に論文を書いた経験がないということが大きなコンプレックスとなり、自分には無理なのではないか、と思い悩む毎日でした。しかし、私にできることは諦めないことだ、と心が折れそうになってもひたむきに研究を続けました。この修士の2年間はとても長かったようで、ひたすら駆け抜けた2年間でした。

今思えば、その中で得たかけがえのない学友や、自分の限界と戦って得た自信は、一生の宝となり、東北大学修士課程卒業という看板は、人生を変えるほど大きなものとなりました。卒業後、夢であった国際協力の仕事につき、今

はバングラディッシュで日本への留学事業に携わっています。今、こうして自分の夢を叶え、国際協力の世界で働くことを可能にしているのは、単に東北大学出身という肩書だけではないことを実感しています。

東北大学では、日本を代表する高いレベルを誇る研究機関の中で、指導教員の方々に厳しく指導いただき、時には見守っていただきながら、先輩、後輩、学友に日々刺激を受け、一つの研究を成し遂げ、論文を書き上げることができました。この経験を通して、自分自身を確実に成長させることができました。この成長がなければ、私の人生は全く違うものになっていたと思います。

これから大学院進学を志すみなさんにとって東北大学は、最適な環境で研究を行い、更なる学びを得ることができる場です。そしてそれ以上に、自分の世界を広げることができる場所です。国際色豊かな研究環境で、一流の先生方のもとで、ぜひ人生を変える研究をしてください。



## 令和5年度科学研究費補助金採択一覧

| 氏 名              | 課題番号     | 研究種目    | 新・継 | 研究課題名                                    | 備 考          |
|------------------|----------|---------|-----|------------------------------------------|--------------|
| ゴダール, クリントン      | 19H01197 | 基盤研究(B) | 継   | 越境する日蓮主義の基礎研究—トランスナショナル・ジェンダー・スピリチュアリティ  | 補助金          |
| ジスク, マシュー        | 19H01265 | 基盤研究(B) | 継   | 多言語による日本語学用語辞典および日琉諸語の用例に対するグロス規範の作成     | 補助金          |
| 大河原 知樹           | 19H01404 | 基盤研究(B) | 継   | 民法、民事訴訟法におけるイスラーム法と中東法の国際比較研究            | 補助金          |
| 池田 亮             | 21H00685 | 基盤研究(B) | 継   | 「航行の自由」と英米覇権—開かれた国際海洋秩序とそれへの挑戦           | 補助金          |
| 青木 俊明            | 21H01449 | 基盤研究(B) | 継   | 心理要因と認知バイアスを考慮した居住意思決定理論の実証と縮退地域の居住政策の提案 | 補助金          |
| 佐藤 雪野            | 21H03699 | 基盤研究(B) | 継   | EUにおける移民・難民統合政策の課題と展望—旧社会主義圏を中心に         | 補助金          |
| Jeong Hyeonjeong | 22H00674 | 基盤研究(B) | 継   | 他者との相互作用を通じた第二言語習得の神経基盤—口頭・筆記の共通性と特殊性—   | 補助金          |
| 大河原 知樹           | 23H00748 | 基盤研究(B) | 新   | 中東における協働・共有の法制と実態：組合と財産共有                | 補助金          |
| 中本 武志            | 17K02670 | 基盤研究(C) | 継   | 日中バイリンガル幼児のコード・スイッチングに見られる普遍的制約          | 基金           |
| 杉浦 謙介            | 18K00820 | 基盤研究(C) | 継   | 外国語eラーニング教材の仕様最適化—学習効果・使用者評価・学習実態に基づく研究— | 基金・名誉教授      |
| 志柿 光浩            | 18K00821 | 基盤研究(C) | 継   | 大学外国語教育プログラム内評価に適合したスペイン語スピーキング能力測定手法の開発 | 基金・名誉教授      |
| 鈴木 美津子           | 19K00439 | 基盤研究(C) | 継   | ロマン主義時代の文学作品に見られるウォレン・ヘースティンズ表象          | 基金・名誉教授      |
| 黒田 卓             | 19K01012 | 基盤研究(C) | 継   | イラン系ムスリム知識人がみた近代世界                       | 基金・名誉教授      |
| 渡邊 竜太            | 19K01049 | 基盤研究(C) | 継   | チェコ/ドイツ国境地域における20世紀地域社会史                 | 基金・GSICSフェロー |
| 勝間田 弘            | 19K01519 | 基盤研究(C) | 継   | ASEAN外交と国際関係の理論                          | 基金           |
| 坂巻 康司            | 20K00489 | 基盤研究(C) | 継   | 近現代フランス演劇における＜祝祭＞概念の総括的検討                | 基金           |
| 小原 豊志            | 20K01032 | 基盤研究(C) | 継   | 異端のデモクラシー—初期アメリカ合衆国における人民主権論のポピュリズム的展開—  | 基金           |
| 朱 琳              | 20K01468 | 基盤研究(C) | 継   | 清末知識人と明治日本の政治学——東アジアにおける連鎖と比較の政治思想史      | 基金           |
| 市川 真理子           | 21K00338 | 基盤研究(C) | 継   | 近代初期イギリス演劇における基本的舞台道具の使用方法に関する総合的研究      | 基金・名誉教授      |
| 鈴木 道男            | 21K00415 | 基盤研究(C) | 継   | 「国民詩人」の共有とディアスポラメディアによる「民族」形成機能と文学       | 基金・名誉教授      |
| 高橋 大厚            | 21K00519 | 基盤研究(C) | 継   | ラベリング理論の精緻化：中国語のスルーシングを通して               | 基金           |
| 江藤 裕之            | 21K00753 | 基盤研究(C) | 継   | 香港、タイの大学における課外英語学習支援の現状、及び我が国の大学英語教育への応用 | 基金           |
| 山下 博司            | 22K00068 | 基盤研究(C) | 継   | マレー半島南半の複合社会における宗教の多元的共存と包摂的共生秩序の研究      | 基金・名誉教授      |
| 勝山 稔             | 22K00287 | 基盤研究(C) | 継   | 中国通俗小説受容の完全な体系化に向けた研究—民間翻訳の本格導入による多面的解析  | 基金           |
| 藤田 恭子            | 22K00460 | 基盤研究(C) | 継   | ディアスポラとしてのルーマニア・ドイツ語話者と文学—世界への拡散・孤立化・連帯— | 基金           |



令和5年10月6日現在

| 氏 名                    | 課題番号名    | 研究種目                  | 新・継 | 研究課題名                                                                                       | 備 考           |
|------------------------|----------|-----------------------|-----|---------------------------------------------------------------------------------------------|---------------|
| 大窪 和明                  | 22K04361 | 基盤研究(C)               | 継   | データ駆動型ロバスト最適化による次世代の復興土地利用計画に関する研究                                                          | 基金            |
| 妙木 忍                   | 23K11671 | 基盤研究(C)               | 新   | 女性のライフコース選択を支えた地域社会の実証的研究—日本の芸者文化を事例として—                                                    | 基金            |
| 井上 浩一                  | 23K00452 | 基盤研究(C)               | 新   | 近現代『西遊記』翻訳史の構築                                                                              | 基金・GSICSフェロー  |
| 佐藤 恒徳                  | 23K00086 | 基盤研究(C)               | 新   | クリスティアン・ヴォルフ『第一哲学即ち存在論』の存在論の研究                                                              | 基金・GSICSフェロー  |
| 鈴木 美津子                 | 23K00349 | 基盤研究(C)               | 新   | ロマン主義時代の文学作品に見られるアメリカ表象                                                                     | 基金・名誉教授       |
| Jeong Hyeonjeong       | 22K18464 | 挑戦的研究(萌芽)             | 継   | 外国語による感情処理神経メカニズムの解明—教室外の言語経験とfMRIの融合—                                                      | 基金            |
| 妙木 忍                   | 17K17596 | 若手研究(B)               | 継   | 医学的まなざしと女性の身体—解剖学と展示の政治性をめぐる国際比較研究—                                                         | 基金            |
| 熊谷 摩耶                  | 17K18311 | 若手研究(B)               | 継   | マカートニー使節団の記録にみる中国像——未公刊史料を中心に——                                                             | 基金・GSICSフェロー  |
| 中山 真里子                 | 19K14468 | 若手研究                  | 継   | 日英バイリンガルのL2表記表象の解明                                                                          | 基金            |
| 目黒 志帆美                 | 20K13220 | 若手研究                  | 継   | 「デモクラシー」の受容と拒絶—19世紀ハワイ王国における憲法制定過程の考察                                                       | 基金            |
| メスロピャン, メリネ            | 21K13085 | 若手研究                  | 継   | Armenian Refugees in the Early 20th c. Japan: Mixed Methods Analysis                        | 基金・GSICSフェロー  |
| 佐藤 正弘                  | 21K13276 | 若手研究                  | 継   | COVID-19の感染リスク等に関する社会的学習の実証研究                                                               | 基金            |
| 繁田 真爾                  | 22K12987 | 若手研究                  | 継   | 「悪」の統治実践と人間観をめぐる近現代日本の思想史的研究—監獄教誨・死刑・宗教—                                                    | 基金・GSICSフェロー  |
| 内原 卓海                  | 22K13168 | 若手研究                  | 継   | Exploring the validity of productive vocabulary tests for second language learners          | 基金            |
| 吉原 将大                  | 22K13867 | 若手研究                  | 継   | 視覚刺激の空間的変化が単語認知に及ぼす影響の解明                                                                    | 基金・特別研究員      |
| 劉 庭秀                   | 19KK0272 | 国際共同研究加速基金(国際共同研究(B)) | 継   | 遊牧民のエネルギー・環境問題の実態解明と持続可能性の再構築—HEVの有効利用策—                                                    | 基金            |
| 山下 博司                  | 22KK0001 | 国際共同研究加速基金(国際共同研究(B)) | 継   | アジア多文化社会におけるエスニシティと宗教間宥和—日本の移民問題等も視野に                                                       | 基金・名誉教授       |
| 内原 卓海                  | 21K19995 | 研究活動スタート支援            | 継   | 第二言語音声語彙習得と個人差要因の関係の調査:横断・縦断研究                                                              | 基金            |
| 和田 萌                   | 22K20107 | 研究活動スタート支援            | 継   | 現代フランスの対外政策における宗教事象の位置付け—ライシテ外交を中心に—                                                        | 基金            |
| DARDON DIEGO・ELISANDRO | 23K18641 | 研究活動スタート支援            | 新   | Individual Differences and the Neural Correlates of Learning Nominal Classification Systems | 基金・GSICSフェロー  |
| 大澤 絢子                  | 22KJ0161 | 特別研究員奨励費              | 継   | 性に見る近代日本仏教の教祖像——史実と創作の相互関係——                                                                | 基金・特別研究員      |
| 吉原 将大                  | 22KJ0211 | 特別研究員奨励費              | 継   | 第二言語としての日本語における語彙獲得プロセスの解明:語彙競合による検証                                                        | 基金・特別研究員      |
| 中本 武志                  | 22KF0028 | 特別研究員奨励費              | 継   | 日本語コーパスの比較分析および応用研究                                                                         | 基金・外国人特別研究員   |
| 韓 相允                   | 23KJ0142 | 特別研究員奨励費              | 新   | 戦後日本における密教とオカルトの諸相——グローバル宗教史の観点から                                                           | 基金・特別研究員(DC2) |
| NGUYEN THI THU HUYNH   | 23KJ0146 | 特別研究員奨励費              | 新   | ベトナム語による漢文読解の実証的研究                                                                          | 基金・特別研究員(DC2) |



## キャリア講習会

国際文化研究科では、毎年、様々な分野で活躍する修了生にご自身の経験談をお話しいただいております。昨年度は山梨学院高等学校留学生支援事務局主任をされている呂春萃さん(国際環境システム論講座博士前期2年の課程修了生)を講師としてお招きし、令和4年11月19日に講習会を開催しました。呂さんは本研究科を修了後、仙台育英学園高等学校を経て、令和4年4月から現職に就かれています。講演で呂さんは、御自身が日本の職場で経験して来た様々な出来事について懇切に説明され、日本において外国人が仕事をする際の難しさを分かり易く解説してくれました。簡潔にまとめられたお話からは、呂さんの日常での丁寧な仕事を窺い知ることが出来ました。オンラインで参加した聴衆の多くは留学生でしたが、非常に真摯な態度で——恐らく自らの将来を想像しつつ——講習会に臨んでいたことが印象に残りました。非常に有意義なキャリア講習会になったように思われます。(坂巻康司)

## 公開講座

令和4年11月26日に実施された公開講座は「環境と防災——SDGsの達成に向けて」というテーマを掲げ、現在、世界的な規模で深刻化している環境問題や様々な災害への対応といった課題について考えることを目指しました。まず、国際政治経済論講座の大窪和明先生に、「データを活用した災害に強いまちづくり」というテーマでお話いただき、災害対応に向けた詳細な調査の数々の具体例を示していただきました。続いて、国際環境資源政策論講座の泉貴子先生に、「『仙台防災枠組』実現への貢献：私たちにできること」というテーマでお話いただき、国際的な視野に基づく防災戦略や支援のあり方について、これまた豊富な資料を基に明快に説明していただきました。両講演とも、災害や環境問題が目前に迫る現在の状況に私たちが向き合うための指針を示していただくような内容でした。オンラインではありましたが活発な質疑応答があり、こうした問題への関心の高さが窺えました。(坂巻康司)

## 国際シンポジウム

2022年11月26日(土)午後1時～6時、リモートで国際シンポジウム「近代日本の中国学の光と影Ⅲ」が開催され、日本および海外の学者や学生などが150名ほど参加した。本シンポジウムは中国学の足跡を問うシリーズの第三弾にあたり、現在三回のシンポジウムの内容をまとめて出版する計画を進めている。

山室信一・京都大学名誉教授が「『シナ通』とはいかなる存在だったのか——『中国知』のポリフォニーを巡って」と題して基調講演を行い、続いて日中の研究者らが研究発表や討論をした。研究発表は、池澤一郎・早稲田大学文学学術院教授「吉川幸次郎先生と日本漢学」、李建華・北京理工大学外国語学院准教授「津田左右吉の中国観」、戦暁梅・国際日本文化研究センター教授「富岡鉄斎の晩年芸術と京大中国学の人々」、塚本鷹充・東京大学東洋文化研究所教授「美術史学(様式論)と中国学のはざま——瀧精一と金原省吾」である。総合討論に苅部直・東京大学法学部教授と稲賀繁美・京都精華大学国際文化学部教授が加わり、朱琳・東北大学大学院国際文化研究科准教授が司会を務めた。(朱琳)

## オンライン入試説明会

2023年6月9日18時から、国際文化研究科オンライン入試説明会が開催されました。申込者は53名で、実際に参加したのは41名でした。例年、留学生の参加が多い説明会で、今年も同様の傾向がありましたが、日本人志願者も見られました。当日、入試実施委員長がスライドを用いながら、東北大学と研究科の紹介をした後、昨年度と比較して今年度入試の変更点を説明しました。大きな変更点としては、今年度からオンライン出願システム(TAO)を導入したことが挙げられます。それに続き、各講座の学生が自分の講座の研究内容や指導の様子を紹介しましたが、各講座で質が高くきめ細かな指導が行われていることを物語るものでした。その後参加者からは、具体的な試験勉強の方法や英語コースに関する質問など、多くの質問が寄せられました。いずれも国際文化研究科への関心の高さを表していたといえます。最後に、説明会に参加してくださった方々と、充実した内容のスライドを含め全ての準備をしてくださった教務係の方々にお礼申し上げます。(池田亮)

## 入学を希望される皆様へ

## 春季入学試験は

令和6(2024)年2月8日(木)、9日(金)に行われます。

本研究科は、柔軟な思考力と広い視野および一定の語学力を有して、国際舞台で活躍できる創造的研究者または高度専門職業人になろうという明確な目的意識を持った学生を求めています。

なお、上記の入学試験の詳細については、本研究科ホームページをご覧ください。

お問い合わせは、本研究科教務係において受け付けています。

## 連絡先

東北大学国際文化研究科 教務係

TEL: 022-795-7556 / FAX: 022-795-7583

E-mail: int-kkdk@grp.tohoku.ac.jp